

[特別寄稿]

永井潔の哲学・芸術論 1 (反映論)

Philosophy and Art Theory of Kiyoshi NAGAI –Part 1 : Reflectionism

五十嵐 嘉 晴
IGARASHI Yoshiharu

本誌は開学70周年に発行されるとのことで、私がそこに寄稿することを光栄に思います。本学の70年の歴史を想い起こし、その間の努力と発展に敬意を表します。そして本学の今日の到達を祝し、さらなる充実と進展を期待しています。

専門を美学として奉職し、いまま美学研究を続ける私は、紀要には回想を綴るよりは、研究の一端を描いながら提出することが相応しいと考えました。

☆ ☆ ☆

私は永井潔（1916年～2008年）の芸術論を研究して、彼の論はより広範に知られる必要があると思った。なぜなら彼は反映論に新境地を切り開いたと言えるからである。それはヘーゲルなどの哲学を参照しているため難渋である。しかしそれを一々詳しく噛み砕いて説明するには、膨大な字数を要する。そこで本稿ではそれにスペースを割くよりも、永井の論の要点の幾つかだけを取り出す。それらの解説はある程度試みるが、難解さは残るであろう。また永井の論についての検討を十分に展開する余裕もないので、ほとんど紹介的なものとなる。

永井潔の経歴や画業、美術活動などについては、諸文献等やインターネット上でも紹介があるので、本稿ではほとんど触れないこととする。永井潔は画家であったが、精力的に執筆もして多くの理論的著作を残した。その中から、本稿で特に参照した書籍は、『芸術論ノート』1970年、『反映と創造 芸術論への序説』1981年、『美と芸術の理論』2004年である¹。

1. 存在と反映

永井潔の哲学や芸術論はヘーゲルの哲学研究から発しているのではないが、ヘーゲルなどを参照して理論的考察を深化させ、創造的にさえした²。永井によれば、存在は反映がそこから流れ出す反映の主体であり、また反映がそこへ還って行く対象的な客体でもある。それは存在自体の運動の中で主体と客体がたえず交替することであり、存在はこのような生動的葛藤の総体である³。この考えがヘーゲルの論理学に支えられていることは、「ヘーゲルの反映概念の重要な特徴は、存在の本質そのものの運動から必然的に生まれてくる現象である点である」との彼の言及以外に、その『反映と創造』のあちこちに見られる⁴。今日の哲学では、本質論はあまり顧みられない気味がある。それには色々な原因があるが、一般にEssentialismとは、事物の変化しない核心部分を実体で本質と考えており、これはプラトンのアイデアなど以来の形而上学的な思考とされているからであろう。いまここで本質や本質論の論議には立ち入らないが、ヘーゲルの哲学は形而上学的であっても、本質に運動や弁証法的矛盾の性格を認めている。永井は例えば次のように言う。「本質が存在の過去形であると指摘したヘーゲルの言葉は、実に鋭く的確だと思う。本質が仮象としてしか現れないのは、過ぎ去った実在の累積結果であるからなのだ。過去は常に実在の非実在化である。しかも現在に痕跡として仮象する。型が仮象でありながら逆に現存在を束縛する所以も、その歴史的成立経過から由来するのである。」⁵ 確かにこうした表現は難

解であろうが、本稿で後に仮象や型などの意味を説明するので、この引用句の理解も進むであろう。

反映、汎反映論

永井はヘーゲルに基づいて、「反映は矛盾そのものの現れである」とする⁶。この意味はヘーゲルの弁証法的論理の認識無しには十分には理解できないが、その解説は簡単に出来ないのでここでは割愛する。さてヘーゲルなどの使う Reflexion は、反照、反省、反射なども訳されるが、光の反射が敷衍されており、訳語には反映が一般に適当だろう。反映と言う語感には、映像性や仮象性が表わされるし、外延が広いだろう。なお、Wiederspiegelung, nachdenken は Reflexion に属する⁷。また反映は反影とも書かれて、影響を及ぼす意味を持つがこの意味が反映概念において大きな意義を持つことは後述する。永井はまた、「うつす」は、日本語でも映る、移る、写す、現(ウツ)し、顕(ウツ)しなどにも通じ、さらには「うつろい」(虚しさ)などにも通じると指摘する。反映に生じる仮象(映現、Schein)の映えるが、生える、栄えるなど生成 werden の意味にもつながるとも言う⁸。このように外国からの教養だけではない、自主的な考察展開も見られる。

カントでは反省的(特殊から普遍を見出す)判断力などの用語があったが、ヘーゲルはそれは主観的に止まっていると批判し、反省、反照が存在の根本である客観的な根幹であることを論じた。そしてこれを読んだレーニンの指摘に基づき、永井はヘーゲルから反映の弁証法的な概念を研究した⁹。しかし自分は画家であり、哲学理論には市井の一介の素人だと謙遜しながら哲学的考察を進めた。彼のモットーは、現実だけを基準とし事実と道理にかなっていることである¹⁰。「反映論は本来常識的なものである」とも言う¹¹。常識的だと人は自然に素朴実在論的とか唯物論的であり、永井はマルクスに同調してヘーゲルが逆立ちしているを見て、さらに上下をひっくり返してその思惟を吸収した。そして訓詁学的な考証ではなく常識に基づいた自主的考察で、彼は唯物論と弁証法を血肉化したように自由闊達さと

大胆な自信を見せる。例えばヘーゲルを汎反映論と認めながら、「もともとヘーゲルが何といおうと、そんなことは反映論そのものには何の関わりもないことである」¹²と言ったり、「私は自分の意見がマルクスの意見とちがっていても、たいして気にならない」¹³とか「仮にマルクスが反映という言葉を一度も使わなかったとしても、そのことによって反映論が傷つくなどとは少しも思わない」¹⁴と言う。ともあれ永井は、「物質的存在の運動法則が基礎的な規定であって、これなしに反映が独立に生じることはありえないだろう」¹⁵とする。そして反映論とは、「客観的に意識のすべてが、(反映論に反対している意識をも含めて)物質的現実の反映であると主張しているのだ」¹⁶と言う。この反映論は包摂的規定であるとし、「〈汎反映説〉でないような反映論は、そもそもなり立ちえないだろう」とする¹⁷。

反映と規定

さて、「反映は反映以外の何ものかの存在(それが自己であろうと他者であろうと)によって規定されているから反映なのである。規定性が映現するのであり、規定が反映に転化するのだ」¹⁸と言えよう。但し、規定しているといっても、直ちにそれは反映を意味しているわけではない一方、反映していないという意味も含んでいないと永井は分析して、次のように述べている。「そこでは反映と規定の両概念が互いに別々の概念として無関係に置かれているだけなのである。(中略)ただ、規定されるものが規定するものではないという虚しさとして規定され、その虚しさが規定するものの側に撥ね返って規定するものの規定する性質を充実させ、規定するものを虚しくない規定者の存在として限定するとき、相互規定関係は虚実という反映関係に移行する。(中略)規定と反映の区別は、その差異をとことんまで追いつめて、具体的な対立関係にまでもたらずと、その対立関係そのものの中から、両者の同一性の側面が浮かび出てくるのである。つまり規定と反映が不可分であることが具体的に明らかになる。だからヘーゲルの反映の段階的発展史やその重層的構造は、一方

では規定の発展史と重層構造にそのまま重なり合っているものであり、反映の発展は規定の発展の裏側である。反映と規定の両概念は、互いの裏返しとして対立の相において扱えられるとき、規定的反映もしくは反映規定として統一される。この際規定を反映に統一するモメントは裏返しとしての否定である。]¹⁹ この言及も、純粋な存在（有）は無規定性で空虚であり無であるとするヘーゲルの論理とその弁証法的な運動理解に裏づけされている。

反映運動の往復性

反映について永井が一番強調したかったのは、次の指摘だろう。「反映論を否認する人々の多くは、反映の否定的本性を見逃しており、(中略)一本調子に肯定的にのみ扱っている。」²⁰ しかし「一切の反映は、受動の能動への反転的運動によってのみ反映と規定されうるのだと私は思う。反射と仮象の結合である反映は、それ自身で映現と言う能動性でもあるのだ。ただ、無機物質と有機物質、動物、社会的人間、などの構造レベルのちがいで、反映の屈折運動は異なった媒介の構造をもち、したがって映像の現れ方も反作用への運動のし方もちがうのである。」²¹ 反映は往と復の屈折運動であり、「その発展としての意識は、外から内へという求心過程と内から外へという遠心過程の両面の統一」と言える²²。被規定者の規定への再逆転が反映にある。彼は受動性そのものがもとの存在に逆規定的な反作用を及ぼす能動的側面を含んでいる事に注目している²³。

反映論には英語ではReflectionism、ドイツ語ではWiderspiegelungstheorieまたはAbbildtheorieを用いるが、この反映運動の戻りの面についての注目はほとんどない²⁴。また永井の著書と同名の池田昌昭著『反映と創造』(2004年発行、創風社)にも、全くこの観点が欠如している。一般に反映論に対しての批判は、ここに一つの理由があるのだろう。

反映の倒叙性と一面性と波動性

永井はまた、反映における倒叙と彼が言う現象に注目している。倒叙とは一般に推理小説での一手法

のようだが、映像では走る電車の窓からは景色が走り、レンズや網膜を通した像は倒立し、鏡像では左右逆に見えたりする反映の通常な様態である。そこで永井は、先ほど挙げた規定性の映現は規定の反映への転化であり、「だから反映は規定関係の倒叙である。反映は被規定であるから、反映の側では規定関係は逆さに叙述される。〈存在が意識を規定する〉することは〈意識が存在を反映する〉ことなのだ」²⁵と言う。そして倒叙の概念から、次のようにも述べる。「唯物論も、とりあえずはまず観念論であり、それ自身観念論の一部として、派生的反面として対立的に出現するほかなかったのであろう。」唯物論は逆立ちした観念論だから、ヘーゲルが逆立ちして見える。「唯物論は、実在論の逆立ちの逆立ちという自覚に支えられているのである。意識は、自然的に措定された一般的反映の一部でありながら、そこから派生してその外に立つような反映である。(中略)意識と反映は同等性の中で対立している。(意識が反映でないという錯覚もそこから生ずるわけであろう)」²⁶。こうした反映の倒叙性は、認識に様々な誤解を起こさせるであろう。

さらに永井は、反映像は倒叙だけではなく一面的なことにも留意させる。「一面性を帯びない像などというものは、どこにも存在しない」「反映や像が反映や像として認められるのは、それらが反映主体によってそれぞれ異なった特性を帯びているからこそなのである。もしそれが主体的特性を帯びていないならば、自分の意識か他人の意識か区別がつかないばかりでなく、像と現実との区別もつかなくなってしまいうだろう。」²⁷

存在の運動の諸局面は次のように理解される。「あらゆる存在は、運動しつつある一つの実体であるが、それ自身が内部と外部に岐れ、内容と形式、本質と現象、実質と形態などの二面性の統一である。この二面は両極的に対立はしているけれども、別々の二つの実体ではない。だから実体の同一性の観点から見れば、一方が実で他方が虚である反映関係をなしている。」²⁸ 永井のこの言辭を十分に説明するのは、ヘーゲルの論理学を踏まえねばならないが、続

いて永井は独自に以下の指摘をする。「内容と形式は、たえざる不一致によって、不一致の反復によって一致に向かう、振動的相互規定性である。だから反映は存在の発展を促し、存在関係の発展に制約されて、反映自身の波動的発展軌道をも描くのである。」そこにはズレが生じているのであり、「内容が形式に直線的に一致するなら、内容と形式は区別されないと同然のことになってしまう。すべての形式や映像は、媒介関係の中で、循環の連鎖の中で、屈折の連鎖が描く波動の中でしか、内容や現実と一致しないのである。」ちょうど盥の水がたえまない波立ちによって水平を表すように、波動がある²⁹。「反映運動のこのような弁証法的発展構造から出てくることは、現実とその映像の法則的なずれであり、くいちがいである。それは、反映が必ず何らかの程度に一面的な反映であるばかりでなく、必ず転倒的な映像を結ぶという倒叙的法則性にもつながっている。映像はただずれを伴った復元屈折によってしか現実と一致しないのである。」³⁰ズレが重要なモメントであることについては、次の局面が挙げられている。自律性を獲得する意識、「真に意識らしい意識は、外部現実と内部現実とのずれからはじまる」。だから頭脳で自己内反映と外部に即応した知覚を区別するようになって、心の“存在”がはっきりしてくる³¹。

反映の仮象性、その運動と真

さて、反映は不可避免的に仮象を構成する³²。ただし媒介としての仮象の規定力は、それだけではまだ潜在的で、仮象のリアリティはまだ十分に客観性を備えてはいない。仮象から現実を逆探知するものは仮象の外に立つ仮象の他者である。しかし仮象は他在する現実の探知者を求める傾向性を秘めている。仮象や実像は実在に対する像の諸側面で、相互に移行し転化し合う³³。ところで仮象を根本から説明すれば、次のように言える。あらゆる存在は、「現象しなければ存在する証拠がない。存在が外界に表れるということは、存在が姿をもつことである。この姿はその存在の姿であり、その存在の実質に規定され

ている。しかし姿は外界に現れるのであってもとも外界に属している。その存在自身には自分の姿は見えない。存在の姿でありながら外界に属するという姿本来の性格の中に、存在とその像の分離が胚胎している。ただ出現しただけの物は、外界に自分の像を属させているだけで、自分のもとにもっていない。だから一切の像は他所にあるもので自分の空しさでしかない。一切の像がまず仮象性である。」³⁴この仮象は反映運動で、実像に回帰する。「あらゆるものの像は、外界にしか現れえないのだから、一度外に属してから回帰するのでなければそのもの自身の実像にはなりえないのである。実像にとって回帰は絶対的である。ところで、実像も像であり(中略)存在そのものではない。(中略)実像は存在に環帰し、あたかも存在自身であるかのような顔をしてはいるけれども、仮象性や映像性をそれ自身の中に止揚的に保持しているのである。」³⁵ここでも否定の否定という弁証法的展開が見られる。ヘーゲルは意識の反省機能の止揚として、反映を媒介して存在が存在そのものへの必然的還帰過程を描き出している。それは、反映が存在の他面(負)として、負から負へ、負の負へと、媒介を重ねて、常に仮象の否定へと向かう仮象自身の否定的運動であることを明らかにしている。永井は言う。「反映は反映の否定において真に反映となる。真理は反映の仮象性が仮象自身の中で終局的に否定された姿であろう。」³⁶

2. 意識 認識

意識と認識については、本来いろいろな側面を検討しなければならないが、本稿では若干の要点を取り上げるだけにする。先ずまたヘーゲル的な論法だが、永井の反映論では意識は仮象の存在であることを確認しておきたい。「〈非有の自体的存在〉は、〈ない〉ことによって〈ある〉のであり、まさに〈ない〉ことによってのみ〈ある〉のである。それが仮象の仮象たる所以であろう。意識は物質として実在しないから、意識として存在するのである。」³⁷

人間的意識の生成

ところで、「誰でも自分の生まれる前のことは知らないのと同じように、意識も自分の生前を直接には知らないのである。」³⁸ 人の意識は、動物的自動的行動が外界の干渉で抑制され生まれる。肉体の内部的な自己関係だけでは映現せず、行動を通じての外界との関係と織りなして映現する。「対自関係と対他関係の重層関係こそ、反映を意識にまで質的に飛躍させる契機であろう。人間という系は、多次元的循環系の重層構造なのだ。そこから重層的反映構造としての意識が生まれるのだ。」³⁹ 以下しばらく説明を省いて永井の考察を列挙する。「主体が対象世界にただ融合的に順応している限りでは、意識はまだ鮮明にならない。外界に対して変革的に働きかける主体だけが、意識を生むに足るような矛盾と衝撃をつくり出す。」そこでは、道具の使用が肝要な媒介となる。眼や耳にとっての「光や音波のような自然に与えられた媒介者と、人工的な道具の媒介とでは、おのずと人間の意識にとっての意味が異なってくる。直接的な知覚と間接的洞察性を鮮明にした想像や思惟との相違を決定するのはこの点であろう。人工的な物的手段の知覚は、洞察の間接意識の中で手段的に機能するが、つまり、物的手段が人間と外界を仲介しているかのように映現するが、実際の過程はむしろ逆であろう。人間の方が物的手段と対象的外界を結びつけ仲介しているのである。人間自身が太陽光線のように振舞っているのである。〈他のものを顕かにすることによって自分自身を顕かにする〉自我の態度がここに萌芽しているのだと思う。」⁴⁰ また「意識が意識され、意識とは何かが意識自身によって（中略）自覚的に問題にされることによって、その反面としての実在も鮮明に意識されるようになり、意識と実在の関係が比較判断的に問題にされるようになる」⁴¹。そして、「最も意識的な（意識として鮮明な）行動制御機能であるところこそ認識の認識たる特質が生じているのである。」⁴²

想像力

『反映と創造』の「認識の出発としての想像」の節

には次の考察がある。原始時代から道具や言語を作り使う労働の習慣化される行動により、その物的過程が脳の活動に自己内反射して想像力として映現する。「現前の手段の意識こそ、他在する目的の想像にはかならない。道具や言語によって想像力がつくられて行く歴史の発展過程は、その結果である発達した想像力の側からは、あたかも想像力によって道具や言語が発明されたかのように逆立ちした過程に見えるのである。だから想像力は、それ自身によってもう一度洞察的に批判されねばならないのである。ここに、想像が不毛な空想と有意義な想像に分岐する理由も生じている。」意識は想像の段階を媒介にして、はじめて認識らしく成長できる。認識とは想像を止揚して実在をつきとめる意識のことである⁴³。「触覚の直接性は、それ自身の中に、〈手ごたえ〉という間接的判断を歴史的に止揚している（中略）。間接的な判断力や想像力の展開によってこそ意識の仮象的（＝反映的）本性は鮮明になる」⁴⁴。

意識は反映結果だが、結果である意識から認識は出発する。意識から認識への移行は、結果が原因に移行する逆転的過程である⁴⁵。「即自的な知覚や感覚が想像を分化させることが、意識の認識への移行を特徴づけるのであって、想像という間接的不確定的意識の出現によって、はじめて真偽や適否の分裂が可能になってくる」⁴⁶。想像の端緒には、現前しない対象が意識に現れる記憶の呼び起こしがある。記憶こそ知覚と想像の接点であり移行過程である。一方、「願望は経験の累積で育てられる。願望は記憶の変種といってよいと思う。過去を未来に置き換えれば、記憶は願望に転化するものであり、願望の中に現れる対象はすべて記憶の変形である。」⁴⁷

未来、空想、超自然

〈意識は現実の反映だが現在の現実だけの反映〉だとする意見に対して、永井は次のように反論する。「過去や未来を含まない現実などは非現実でしかない。」例えば知覚も過去の像を捉えており、現実における過去と現在をまぜた映像が“現在の意識”である。また未来像も意識に現在生起する。しかも意識

は未来の現実こそ最も強く望む。「未来の現実を望むことによってのみ意識は意識となるといってさえないのである。」⁴⁸ 現実とその反映は厳密には時間的に同時に生じてはいない。実在は未来を含んでいて、「その現存するあり方を人は自分の中に反映して未来を意識する」⁴⁹。この観点は、人の創造性と反映の創造的性質の展望につながるであろう。

また現実を超えるものについて、永井は次の見解を示す。「人間の意識のみが超自然という仮象をもつのは、人間の実践が与えられた外界を変革することによって自分自身の在り方をも変革し、人間存在が自分自身の自然存在をたえず超えるからであろう。実質的な超自然とは社会的人間存在のことにほかならない。超自然の観念はそのような現実的超自然の自分自身への反映としてのみ生ずるのである。」⁵⁰ 超自然という観念は、人の労働が自然の一般的生成を超える運動を作り出す事にに基づき、人の内部にその新しい創造運動が反映して生まれて来た⁵¹。

夢や幻想は現実に対応していないとの考えに抗して、永井は次のことを強調している。「反映論の核心は、(中略) 空想、錯覚、等々の意識が、やはり現実の反映にほかならないことを主張する点にこそある。」⁵² その根拠の一つとして、彼が原始時代の人間の模擬行動(ミーメーシス)を分析した箇所が挙げられる。すなわち、狩りなどの労働を模擬する時、実労働から労働対象や用具が差し引かれ、肉体運動の自動化が起きる。そこでは現実的意識が潜在化し、代わって空想的意識が仮構的に前面に出てくる。現意識が労働のこの加工化行動に熱中すると、いわば知覚そのものが空想に転化する⁵³。また次の考察もそれに加えられよう。夢や空想の自覚は心の独自性を教えるが、「それが物質的現実の反映でないという錯覚をも引き起こす(中略)。けれども、よく反省すればその錯覚自身が錯覚性を自己表明していることがわかる。心が、意識自体であって現実を意識しているのではないと思う時、その心は、心に対立するものとして現実を意識しているわけである。現実を意識することなしに現実の意識とは区別される

心の独自性を意識することはできないから、現実の意識と心の独自性の意識とは同一過程である。(中略) 他在する現実を意識するのが空想である。それは一種の二重意識であろう。現前の対象の意識を潜在化する活動によって、他在する現実の意識が顕在化してくる。これが反映の間接化である」⁵⁴。

真と偽

次に、真と偽についての永井の理解を見ておきたい。「認識について真偽の分化が生ずるのは、もとはといえば、反映そのものが実在との虚実関係の構成であったことに由来しているであろう。虚実関係を前提としてのみ真偽問題が生ずる。即自的な現実には真偽の区別はない。仮象においてのみ真偽の分化が可能になる。(中略) だが、虚実の区別と真偽の区別は同じではない。」例えば現実の生活には嘘と偽りが満ちている一方、芸術的な虚構に真実が見出される体験をする。「虚なるものこそ真の導き手である。」虚実と真偽は反映規定の波動的発展の中の対立であり、段階的対立である。そして「虚実の区別から真偽の区別への移行には、ある逆転が潜んでいると思える。そこでは、肯定的なものとの否定的なものとの関係が逆転するのではないか。」「この段階的移行には、反映の反覆的倒叙的本性が示されている。(中略) 自覚的虚像のみが真の実像たりうる」⁵⁵

「虚構の意識のみが真理の認識を可能にする。(中略) 偽を意識することなしに真を意識することはできないし、真を意識せずに偽を意識することもできない。(中略) 真偽の分化に最も密接な関係をもっているのは、人間が〈ほんもの〉に対する〈にせもの〉を自分の力で実際に造り出すに至ったことだろう。虚構の現実、自然の模像の造形こそ、意識における真偽の分化を導き出す現実的な端緒であったにちがいない(中略)。偽りを知らぬものは、ほとんどまだ真実をも知らないのである。」⁵⁶

意識の自律性

永井の反映論を知るこの場での括りに、意識の自律性の彼の説明を挙げておく。意識は他律的に生成

されるが、「意識は他律性の自律性への移行を示すとともに、その移行自体の中で自律運動が他律運動へ再移行することも示す。意識は主体に規制されることによって、主体を規制するからである。」⁵⁷「意識の自律性は、主体の映像である。主体が外界から自立して自己運動する側面を表している。しかしこの側面の独自性は、主体が外界の作用を受け他律的に動かされる側面との（中略）対比によってしか表れないのである。」先に**人間的意識の生成**で挙げたように、即自的な自己運動はまだ充分な自律運動ではなく、他からの干渉に媒介されて自律の独自性ははっきりしてくる。他律に媒介された自律は、高次な自律で、外界を律する運動に発展する⁵⁸。

そして、「自由意志は現実的自由の反映であり、それ故に、意識のあらゆる段階や形式を総合的に統御する最高の規制力でなければ、実質を確保できないであろう。それは理性の出現である。理性が行動を支配しなければ、真の自由意志とは呼べないだろうと思う。理性の媒介を欠いた意志は恣意に転落し、現実的な支配力を喪失する。理性は、知性と感性を統一し、それらのいずれでもあると同時にいずれでもないことによって、それらの上に重なる独自の意識で」、意識の総括者であり、意識的な自己そのものであり、個性の姿をとった普遍的人間性である⁵⁹。

本稿は要約的紹介であるが、様々な内容を盛り込んだので、短絡的で抽象的な解説になった。より充分な理解は永井の著書参照であろう。また、本稿は表題《永井潔の哲学・芸術論》の反映論しか扱えなかったが、その芸術論については『永井潔の哲学・芸術論 2』として別誌に掲載することとする。

註

- 1 これら著作の内容は、その出版年代以前に書かれたものが編纂されたものであるが、その詳しい年代考証は省く。
- 2 本稿では永井の論の重要な箇所や展開の幾多の部分を省いているが、次の論文にはそれらが要領よくまとめられている。北野 輝『永井潔氏の反映論と芸術の仮象性』、in『唯物論と現代』44号（2010年6月）の77-93頁。
- 3 『反映と創造』60頁
- 4 引用文は同上書53頁から。同書の「ヘーゲルの反映概念」と題された節（52-62頁）など。
- 5 同上書301頁。ドイツ語のsein（有る）の過去形gewesenにWesen（本質）が含まれている。『ヘーゲル全集 7 大論理学 中巻』（武市健人訳、岩波書店）の3頁。G.W.F.Hegel Werke 6 (Wissenschaft der Logik II), S.13, Suhrkamp taschenbuch (wissenschaft 606), 1986.
また例えば宗教の掟は歴史的に形成されたが、原理主義者はあたかも掟が先に定まっていたかのように行動する。
- 6 同上書59頁
- 7 同上書63頁
- 8 同上書92-93頁
- 9 同上書53-61頁
- 10 同上書10、53、69、128、139、199、332頁 & passim.『芸術論ノート』9頁。
- 11 『反映と創造』168頁
- 12 同上書56頁と69頁
- 13 同上書33頁
- 14 同上書8頁。しかし『反映と創造』に「反映論としてのマルクスの商品価値論」と題する節があり（146-152頁）、資本論での価値分析が反映と映現過程であることを指摘している。
- 15 同上書71頁
- 16 同上書50頁
- 17 同上書137-8頁と24頁。ある学者が永井の説を批判して汎反映説と評したが、永井自身もその呼称が良いと思った。cf. 中野徹三「永井潔〈芸術論ノート〉によせて」(1)『美術運動』105号1977年8月号の27頁、日本美術会発行。『芸術論ノート』13頁。
- 18 『反映と創造』70頁
- 19 同上書66-7頁
- 20 同上書57頁
- 21 同上書158頁
- 22 同上書216頁
- 23 同上書71頁
- 24 例えばV.カルプシツキーの反映論についての論考には、この点の留意は全くない。cf. Vlasimir Karbusicky: Widerspiegelungstheorie und Strukturalismus, 1973, Wilhelm Fink Verlag.しかしハンス・ホルツは、「a) 鏡映関係は映されたものと映すものとの相互の関係である（二重の反映）；b) 応答関係（フィードバック）という特殊な関わりのもとで、反映関係そのものももう一度反射される（反映の反映）」などを指摘しその弁証法的性格を理解している。Hans Heinz Holz: Widerspiegelung, 2003, transcript Verlag. 引用文はその70頁から。
- 25 70頁。倒叙性については、cf. 同上書143-145、157、162、188、269頁。また永井潔著『鱒の眩き』170頁や『鱒の眩きその二』205頁。

- 26 『反映と創造』 223頁
- 27 同上書24頁と25頁。「鏡が変われば像も変わる。」
- 28 同上書153頁
- 29 同上書154-5頁
- 30 同上書157頁。 cf. 同上書298頁。
- 31 同上書315-6頁
- 32 同上書83-4頁
- 33 同上書85頁
- 34 同上書77-78頁
- 35 同上書79頁
- 36 同上書239頁
- 37 同上書212頁。非有はNichtsein、自体的はan sich のこと。
cf.ヘーゲル『大論理学』 2、第一編、第一章 仮象の章には
次の文がある。「存在は無性 (Nichtigkeit) を本質のうち
にもっており、そして仮象はこの無性を離れては、すなわ
ち本質を離れては存在しない。仮象は否定的なものとし
て定立された否定的なものである。」Hegel Werke 6 (前掲
書)、S.19. ヘーゲル全集 7 (前掲書) の12頁。
- 38 『反映と創造』 18頁
- 39 同上書118-9頁 & 259頁。
- 40 同上書306-7頁
- 41 同上書223頁
- 42 同上書258頁
- 43 同上書228-9頁。〈想像は人間の本質の反映、映現である〉
同上書303頁。
- 44 同上書227頁。ここでの「間接的」とは、経験の重層化を経
るという意味。
- 45 同上書229頁。cf.意識は想像的、また認識は結果を原因と
しての想像。同上書230頁。
- 46 同上書230頁
- 47 同上書231頁
- 48 同上書38頁
- 49 同上書190頁
- 50 同上書89頁。cf.人の変革的实践と超現実。同上書88-9頁。
- 51 同上書186頁
- 52 同上書26頁
- 53 同上書318頁
- 54 同上書317頁
- 55 同上書221-2頁。実は偽 (仮象) として現れ、虚から真を見る。
- 56 同上書213-4頁。cf.『美と芸術の理論』の112-3頁。
- 57 『反映と創造』 117頁
- 58 同上書118頁
- 59 同上書122頁

(いがらし・よしはる 本学名誉教授／美学)

(2016年10月31日 受理)